

馬場楠井手の鼻ぐり調査について

昭和54年に町文化財に指定された「馬場楠井手の鼻ぐり」は、指定から今まで詳細な測量調査、掘削当時の水路の形状等の確認調査が実施されていなかったため、不明な部分や謎が多くありましたが、平成23・25年度に、「鼻ぐりの川底」と「中須山(遊歩道部分)」の発掘調査を実施しました。

これによりわかったことは・・・

鼻ぐり川底部分の発掘調査箇所で粘土質と砂が交互に埋まった人工的な層が確認されました。堆積は厚いところで60cmありました。このことから川底は自然に土砂が堆積したものではなく、傾斜をつけるため人為的につくられたと考えられます。

なお、調査した部分からは、年代が特定できるような遺物は発見されませんでした。

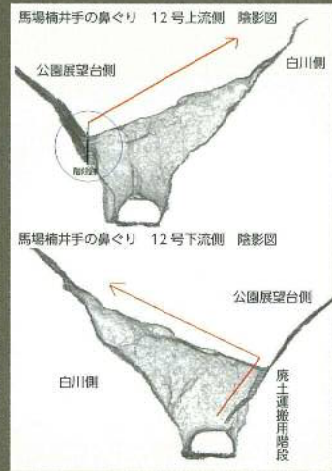
鼻ぐり穴の高さは、水流等で剥落した箇所もあり造られた当初の正確な高さは明らかではありませんが、およそ2mと計測されました。壁面～底面は、鑿や鶴嘴などで掘削した痕跡がはっきり残っており、壁面と底面の境は直角状に、底面は平滑を意識したと思われる丁寧な調整されていました。

鼻ぐり橋については、上面を階段状に造り出して左岸から白川側に向かい「中須山」に登れる形となっているのがほとんどであることから、この中須山を作業道とした可能性があります。当初、鼻ぐり作成時に出された廃土(石くず)を捨てて中須山を形成したと言いつてられていましたが、それがほとんど確認できないため、削りだされた岩の用途や運搬先はナゾのままです。

今後は専門家の意見をもとに馬場楠井手の研究を行い、本町の観光資源、学術資料等として有効な活用を図っていくところです。



▲鼻ぐり測量風景



▶鼻ぐり12号立面印影図
(正確に残された階段の痕)



▲川底の地層



▲鼻ぐり穴の高さ

ばばぐすいで はな 馬場楠井手と鼻ぐり

—現代にも生き続ける歴史的農業土木施設—



馬場楠井手の取水口
阿蘇くまもと空港
うまかな・よかなスタジアム
九州自動車道
東ハイパス
旧豊後街道
北バイパス
馬場楠井手
鼻ぐり

▲熊本市方面から白川上流に向かって撮影

▲鼻ぐり区間拡大図



交通アクセス

熊本インターチェンジ	車で約20分
阿蘇熊本空港	車で約15分
菊陽町役場	車で約10分
JR原水駅	車で約11分



●運転免許センター方面から
国道道路東西線を東に進み
きくちのまんま交差点で左折
後、最初の信号を右折(P有り)

■阿蘇方面から
菊陽バイパスを西に進み、役
場前の菊陽交差点を左折
空港方面に直進し、4つめの
信号を左折

■空港方面から
空港入口交差点を右折後
きくちのまんま交差点を直進し
最初の信号を右折

●問い合わせ先
菊陽町教育委員会生涯学習課
菊池郡菊陽町久保田 2598 番地 (中央公民館内)
TEL.096-232-4917

●ガイド依頼
菊陽町ボランティアガイドの会
菊池郡菊陽町曲手 498 番地 3 (南部町民センター内)
TEL.096-292-3200 (要予約)

●管理
馬場楠堰土地改良区
熊本市東区石原 1 丁目 2-26
TEL.096-374-8188

2015
菊陽町教育委員会

馬場楠井手とは (平成 21 年 2 月 18 日に取水口部分を町文化財に指定)

概要

菊陽町馬場楠の白川取水口から熊本市の大江渡鹿まで約 12kmの井手*で現在でも馬場楠堰土地改良区の適切な管理のもと、176haの田畑に水を供給しています。〔うまかな・よかなスタジアム〕約 87 個分の面積に相当。造られたときの記録は残されていませんが、加藤清正が肥後統治時代（慶長 13 年（1608）ごろ）に築造されたと伝えられています。

※井手とは…人工的に作られた水路のことで田畑に水を供給するとともに、井戸や水道がひかれるまでは生活用水としても利用されました。

築造の目的・機能

白川の南側（白川左岸台地）は、川より一段高い土地が広がっており、水を引くのが困難でした。そこで、上流から水路を掘り治水や新田開発が計画されます。

工事が完成し、延長 12kmにもおよぶ水路が引かれると、9か村（当時）、約 95 町（約 95ha）にもおよぶ農地に水が行き渡り、それまでの約 3 倍の収穫量をあげたそうです。〔勝国治水遺〕鹿子木量平著

■井手が通っている南部村（現・上南部地域）の検地帳（地撫帳）から田んぼの面積を比較すると

時代	検地帳等の名称	田の面積	畑等の面積
慶長 8 年 (1603)	慶長八年十一月 南部村小迫村田畠御検地御帳	7 反 4 畝 (約 7,369㎡)	43 町 5 反 5 畝 (約 431,970㎡)
寛永 12 年 (1635)	寛永十二年七月 御蔵納南部村田畠地撫御帳	18 町 4 反 9 畝 (約 183,441㎡)	24 町 1 反 2 畝 (約 239,276 ㎡)

この地域では 32 年間の間に「畑」が「田んぼ」に代わり、お米が作られる水田の面積が約 25 倍と大幅に増加しています。また、寛永 12 年の地撫帳には馬場楠井手を指す「井手下」の文字が見られます。これらのことから、寛永 12 年（1635）には井手が完成して、水を供給し始めたと考えられています。

文献資料

現在確認されている最も古い資料は 17 世紀末、元禄六年（1693）の『覚帳』（永青文庫蔵 熊本大学 付属図書館寄託）で、馬場楠井手筋のことが記載されており、井樋数*、新しく開発された田の面積、上流と下流に住む人々の間で水を行き渡らせる争いごとについての記録があります。

その後、鹿子木量平（1753-1841）の著書により、鼻ぐりに関する時代や構造の通説が広まりました。

平成 17 年度には熊本県文化課により「旧馬場楠井手取入口」発掘調査が実施され、報告書が作成されています。

※井樋とは…井手から田に水を引くための施設や水門のこと

馬場楠井手の鼻ぐりとは (昭和 54 年 2 月 23 日に馬場楠井手の鼻ぐり区間（辛川～曲手）を町文化財に指定)

概要

岩山を部分的にくりぬき、上部分を橋状に残して造られた特異な構造物。馬場楠井手の 390m 区間に存在し、当初は 80 箇所ほどあったそうですが、現在は 24 箇所を残すのみとなっています。

水の力を利用して溜まった土砂を排出させる仕組みとされ、この穴の形が牛の鼻輪を通す穴（もしくは鼻輪本体）に似ているところが「鼻ぐり」名称の由来とされています。

築造の目的・機能

この鼻ぐりがあるところ（曲手～辛川区間）は、
①小高い山で、厚く固い岩盤が続く所であったため、掘削するには多くの時間と労働力が必要であった。

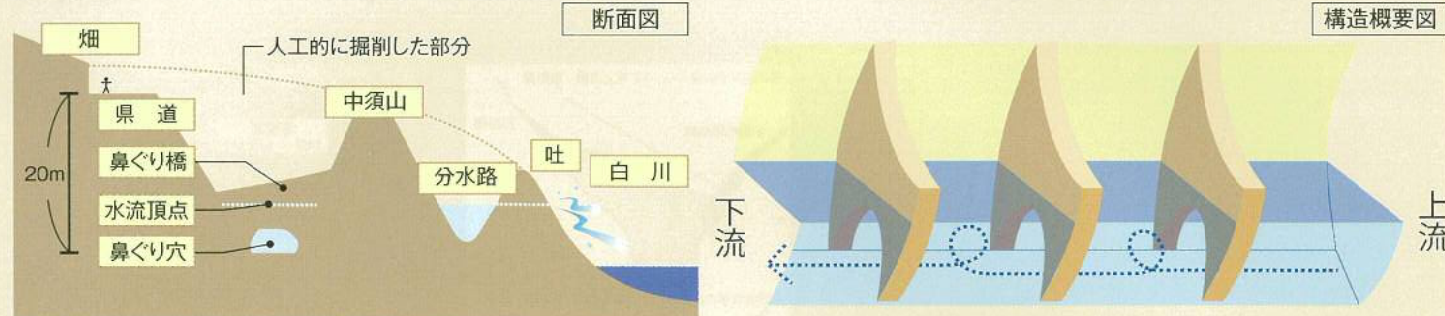
②築造後は地上から底までの深さが約 20 mにもなるため、たままった土砂を人の力で排出することが困難と予想された。* *阿蘇から続く白川は、火山灰土壌のため、流れてきた火山灰（ヨナ）は、川の泥濘や、用水路のつまりなどの原因となりました。



▲鼻ぐり井手の図（『勝国治水遺』の図を明治期に複写したもの）



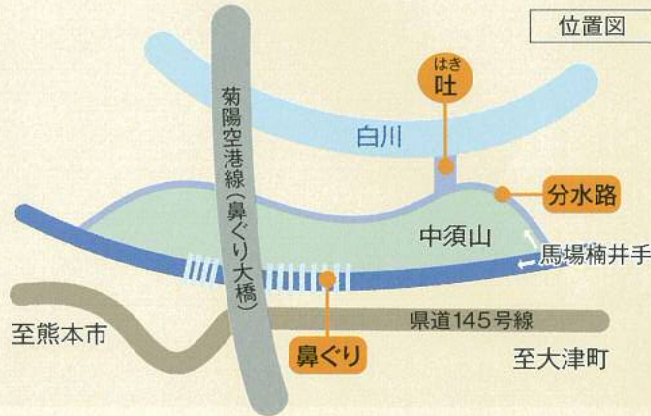
▲渦を巻く鼻ぐり



馬場楠井手の分水路とは

鼻ぐりの北側には中須山をはさんで「分水路」と言われる、もう 1 本の水路が平行して流れており、再び下流で合流しています。

- これには 2 つの水量調整機能があります。
 - ①田畑へ供給する水が不足する場合は… 分水路も使うことで水の通量を増やし、多くの水を田畑に供給します。
 - ②大雨で増水した場合は… 分水路に設けられた「吐」と呼ばれる排水口から水を白川へ落とし、下流の田畑を水害から守ります。
- このように常に安定した水量を保てるような工夫がされており、この井手と受益地を守ろうとした姿勢がうかがえます。



▲馬場楠井手の鼻ぐり オルソ平面図 0 5 10 15 20M



▲「鼻ぐり分水路」出口



▲「鼻ぐり分水路」入口